
山梨大学 教育学部 附属教育実践総合センター センターニュース 第29号

目 次

1. 実践センターの活動（平成29年度～令和2年度）を振り返って 1
2. R2年度 実践センターの活動 4
3. R2年度 各部門の活動報告 5
4. センター教員のひとこと 19

実践センターの活動（平成29年度～令和2年度）を振り返って

山梨大学教育学部附属教育実践総合センター長
田 中 勝

山梨県教育委員会及び附属学校園との連携強化

附属教育実践総合センター（以下、実践センター）のこの4年間の活動内容を示すキーワードを挙げるとすれば、前半2年間は「山梨県教育委員会及び附属学校園との連携」であり、後半2年間は「教職支援の拡充」だったように思われる。前者については山梨県教育委員会と山梨大学教育学部との「連携協力に関する覚書」の締結（平成29年3月）を経て、その直後に実践センター改組（教員育成推進部門と附属学校園共同研究部門の新設）があり、山梨県教育委員会との連携による「教員育成機能の高度化」への取組が加速した。山梨県内の国立教員養成学部としての役割を果たすだけでなく、地域に密着した教育学部として現職教員研修にも注力し、養成と研修を両輪とした新たな地域貢献を推進していくことになった。

これを受けて平成29年度には「教員育成支援状況報告システム」を構築し、学部教員の地域における教員育成支援の多様な実態が把握できるようになった。平成30年度には文科省「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」を教育学部が受託し、1年間の活動成果は令和元年度以降の学部独自事業「山梨における教員育成推進事業」のなかで「教育評価研修会」と「初任者研修等への学部教員の派遣」として現在に引き継がれている。教育相談分野においても山梨県教育委員会との連携事業「地域連携 子どもと親と教師のための教育相談事業」の拡充が進んでいる。

山梨県教育委員会との連携に加えて学部・実践センター・附属学校園の連携を強化するため、学部内に「教員養成・教育実践研究協議会」を設置し、企画局や各部会を中心に第三期中期目標・中期計画に係る種々の取組を推進してきた。実践センターの「教員育成推進部門」と「附属学校園共同研究部門」はこれらの活動を牽引する中心的役割を果たし、時には接着剤・潤滑油となって活動を全面的にサポートしている。

教職支援の拡充

後者の「教職支援の拡充」については、教育学部の教員就職率向上と、学校現場の直面する新たな課題に対応可能な実践的能力を有する教員の養成という2つの課題に取り組むため、令和元年度に再び実践センターを改組した。具体的には、キャリアセンターで行われていた教職支援業務を教職支援室のそれと一体化し、同時に指導体制を強化した（特任教授・特任助手ポストの新設、客員教授の増員、部門長・副部門長及び事務系職員の配置等）。これにより学生から見れば教職支援窓口が一本化して分かりやすくなり、ワンストップ型の教職支援サービスが受けられるようになった。さらに教職支援部門長と教職支援領域・学習カルテ・分析領域・教育ボランティア領域・地域学習アシスト領域を担当する各副部門長による企画立案に加えて学部との調整・橋渡しや情報共有が進み、学部教員の教職支援活動への理解やサポート体制が整っていった。学部の進路支援委員会、教採対策WG、学部長補佐会、微典会等による教職支援活動の足並みが揃い始め、教員志望学生の4年間の学びの見取り図「ACTION PLAN ファイル」や学習履歴システム「キャリポ」の導入によって学生の自学自習を支援する環境も整備されつつある。教採・進路支援関係情報のデータベース化や卒業・修了後のフォローアップ体制も整いつ

つある。

この4年間、教職支援室を訪れる学生の個別指導回数は年々増加し、その成果は教員を目指す意識の高まりや教員採用試験の結果となってあらわれている。18年目を迎えた教育ボランティア活動は今や学生生活の一部となり、観察実習や教育実習とは異なる目的や視点から教育現場を知り、子どもとふれあうのに欠かせない現場体験の機会となっている。令和元年度にスタートした「地域学習アシスト事業」は教育ボランティア活動のアドバンスドコースとしての性格を有し、教職大学院生・専攻科生・学部生・学部教員等によるチーム力によって学校現場の今日的課題の解決に取り組むこの事業は、令和2年度は市内3校の協力を得て本格実施にステップアップした。学校現場の課題を学校と大学とが共有し、協働による課題解決の成果を学校運営や大学教育に共に生かそうとするこの取組は教育ボランティアと同様にWin-Winの関係で成り立っている。

山梨大学教師塾プログラム

実践センターの独自プロジェクトとして「山梨大学教師塾プログラム」がある。教員志望学生の教師力向上を目的として教育実践研究部門が企画・運営の中心となり、見直しを重ねながら内容の充実を図ってきた。特に令和元年度の教職大学院改組と連動して実践センターの教員は厚みを増し、山梨県教育委員会との人事交流による実務家教員や客員教授による強力なサポートを得て教師力プログラムの改善を図ってきた。プログラムの柱となる「教師力養成講座」では後期教育実習を間近に控えた3年生を対象に外部講師や実践センター客員教授による授業づくり、学習指導案作成、模擬授業等の指導を行い、教育実習の不安に対しては教育臨床研究領域の専任教員がメンタルサポートを行う体制を整えた。2年生には全体会で「教職の魅力」を伝えるワークショップ型の授業を導入し、その後の分科会では教職経験豊かな実践センター客員教授等による情報提供や個別相談を行っている。教採に合格した4年生・M2学生向けには現職の管理職の先生方を講師に招いて「初任者元気アップ講座」を開催し、教師としての心構えや学級づくり・授業づくりのコツ、保護者対応等をテーマに教壇に立つ直前まで応援を続けている。このほか模擬授業室の環境整備や他大学の先進事例調査等を含めて、学部1年生から4年生までの全学年を対象として、学生の教師力・授業力を高めるための取組をパッケージにして展開してきたのが「山梨大学教師塾プログラム」の特色である。

連携・教育研究会

山梨県総合教育センターと実践センターによる「連携・教育研究会」は平成19年度にスタートし、現在も活動を継続している。大学はセンター研究のサポートを行い、総合教育センターは大学の講義「学校制度・経営論」を分担する現在のかたちは双方の強みを生かした取組として定着している。

3つの試み

実践センターの活動や運営面において、意識してきたことを3点ほどまとめてみたい。

第一は、活動の「見える化」である。学部附属施設として平成元年6月に産声をあげた実践センターはまもなく32年目を迎えようとしている（詳細は『実践センター30周年記念誌』を参照されたい）。名称変更や改組を重ねて今日に至るが、実践センターの存在は知っていても実際にどのような活動をしているのかをご存知の方は少ないのではないだろうか。そこで、意識してきたことの一つは積極的な「情報発信」であった。実践センターでは開設時から「センターニュース」（年1回）と「センターだより」（原則月1回）を発行し、実践センターとして考えていることや取り組んでいることを広く発信してきた。言ってみれば実践センターの活動日記（自分史）

のようなものであり、これらのバックナンバーは実践センターのホームページでいつでも見ることができる。実践センターの現在は過去の取組の積み重ねの上にあるから、これから進むべき方向を考えると、この伝統は必ず役に立つはずである。

もう一つの情報発信として「センターパンフレット」発行がある。パンフレットは過去に2度ほど発行されたことがあったが、平成29年度以降は毎年内容を更新し、県内教育関係機関をはじめとして幅広く配付している。パンフレットの内容は実践センターの概要紹介にとどめることも可能であるが、実践センターがどこへ向かい、何をしようとしているのかが具体的に分かるように、各部門・領域ごとに活動計画・内容を載せることとした。同時に、「顔の見える関係づくり」にも留意した。組織が大きくなるほど、顔が見えにくくなるからである。実践センターのスタッフには誰がいて何をしているのか、常に顔の見える関係づくりを意識していくことが実践センターに対する正しい理解や、学生及び関係機関等との距離を縮めることにもなると信じ、スタッフの顔写真や氏名の掲載を試みた（そうしたことを望まない方もいらっしゃったはずである）。このほかにも実践センターがかかわる各種事業については紙媒体の印刷物を作成してきたが、インターネットによる情報発信を補う方法としてそれなりに意味があると考えている。

第二は、「外に踏み出す」ことである。学部として、あるいは実践センターとして、何かに取り組もうとするときにこれまでは「学内」を会場として、参加者を「待つ」姿勢が多かったように思われる。そうではなくて、積極的に学外に出ることで新しい連携のかたちが生まれるとすれば、学部や実践センターとして従来とは異なる地域貢献が果たせると考えている。たとえば、学部主催の「教育フォーラム」は平成29年度以降、甲府駅北口の県立図書館多目的ホールを会場としている。距離にして約1キロ、徒歩15分程度の違いに過ぎないが、大学が外へ出てくことにより参加しやすくなり、学部の活動が市民の目にもとまりやすくなる。県内4ヶ所で開催している「教育評価研修会」も同様で、「初任者研修会への学部教員派遣」、「附属学校園教員の派遣」、「地域学習アシスト事業」等、これらすべての事業の共通点は意識が外に向いていることにある。

第三は、「学生にとって身近な存在であるか」を考えることである。実践センターはだれのためにあるのか。学生不在の大学などありえないことを考えると、実践センターの活動の成果は最終的には学生に還っていくものではないか。ただ現実的には実践センターと学生との距離は大きく、学生にはセンターの活動以前にその存在さえも知られていないのではないかと感じてきた。しかし近年、この状況は大きく変化しようとしている。教員志望学生にとって実践センターの「教職支援室」は身近な存在になっているからである。少し前までは一部の学生が訪問していた教職支援室であったが、今や教職を志望する学生の多くがドアをたたくようになった。

いまひとつは山梨大学教師塾プログラムの試みである。「教師力養成講座」や「初任者元気アップ講座」では当初は希望者のみの参加としていた。その後、教員就職率向上の必要もあり、複数免許を取得する卒業要件にあわせた特別授業として教師力養成講座については原則全員参加としている。この結果、実践センター関係教員が学部生と直接かかわる機会が増えていった。学生が、実践センターを少しでも身近に感じてくれるようになったとすればたいへんうれしいことである。今後も、実践センターが学生にとって「頼りになる存在」に一歩ずつ近づいていくことを願うばかりである。

以上、実践センターが取り組んできたこの4年間の活動の一端をご紹介した。これらはすべて学内外の多くの方々のご理解とご協力が得られなければ実現できなかったことばかりである。心よりお礼申しあげたい。

R2 年度 実践センターの活動

4
月

- センター活動開始

5
月

- 第1回連携・教育研究会
- 第1回教育相談室連絡協議会

6
月

- 国立大学教育実践関連センター協議会情報交換会

7
月

- センターパンフレット（R2年度版）発行

8
月

- 子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会@富士東部地区

9
月

- 第97回国立大学教育実践研究関連センター協議会総会
- 後期教育ボランティアガイダンス

10
月

- 日本教育大学協会全国教育実習研究部門第34回研究協議会
- 第2回教育相談室連絡協議会

11
月

- 第3回連携・教育研究会
- 子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会@峡東地区・峡南地区

12
月

- 第36回教育フォーラム
- 令和2年度教育ボランティア報告会
- 秋田大学教育文化学部視察(オンライン)
- 地域連携教育相談連絡会議

1
月

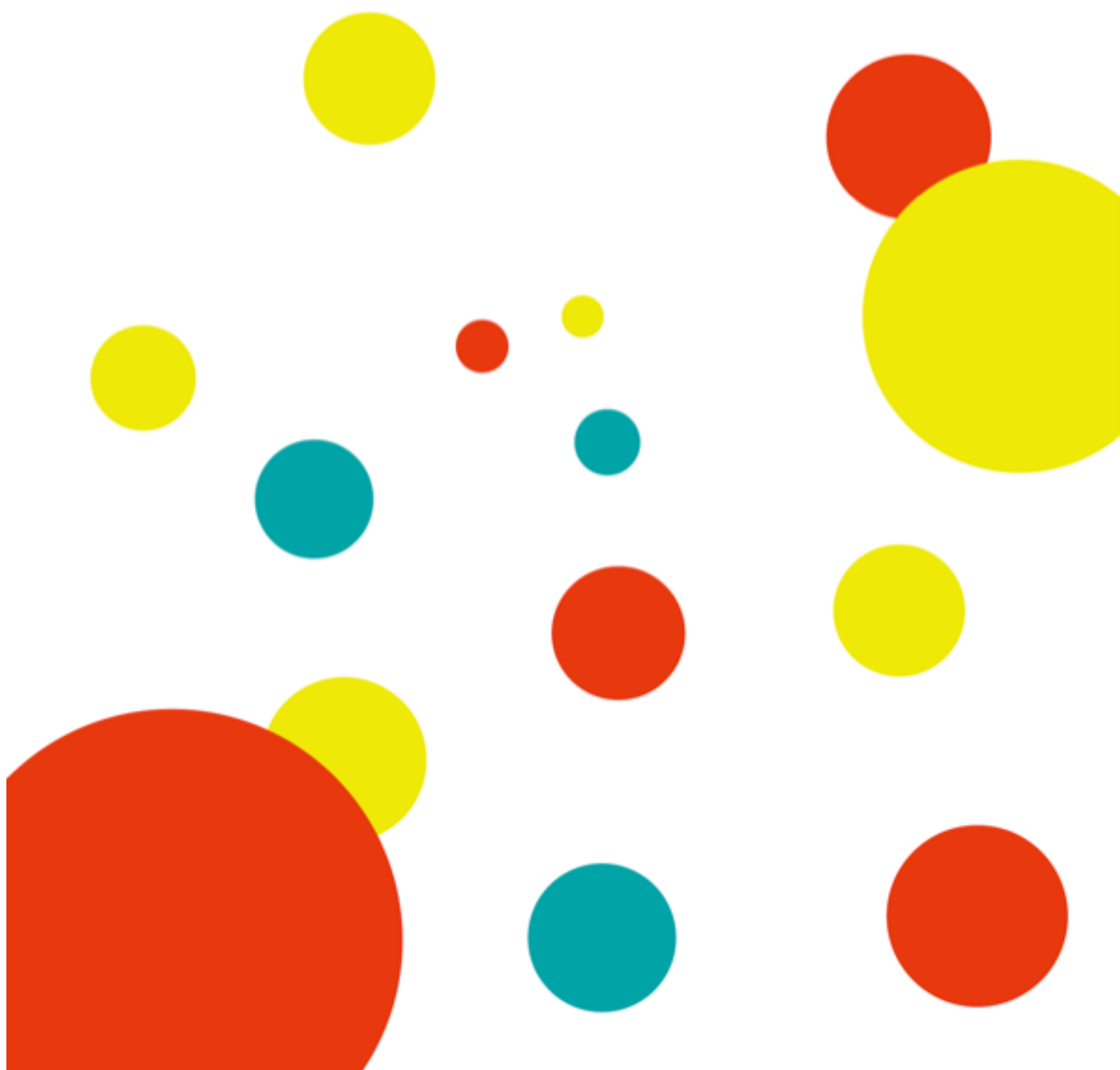
- 第37回教育フォーラム
- 第22回教職大学院教育実践フォーラム
- 教師力養成講座
- 初任者元気アップ講座

2
月

3
月

- 第98回国立大学教育実践研究関連センター協議会総会
- 第5回連携・教育研究会
- 第3回教育相談室連絡協議会

各部門の事業報告



教員育成推進部門 事業報告

1 実践的指導力・人間力を備えた教員の養成

- (1) 教育実習の円滑化・高度化・標準化
- 山梨大学教育学部教育実習運営・連絡協議会（8/21, 2/26）
 - 教職大学院実習連絡協議会（8/21）
 - 教育実習検討専門委員会（12/18）
 - 日本教育大学協会全国教育実習研究部門第34回「日本教育大学協会総会・研究協議会」（オンライン開催）（10/9）
- (2) 山梨大学大学院教育学研究科教育実践創成専攻（教職大学院）教育課程連携協議会（9/11, 2/26）
- (3) 教員採用対策講座ワーキング・グループ（4/8, 5/29, 7/10, 9/25, 1/22）
- 就職活動応援メッセージ動画配信（4/24）
 - 進路支援ガイダンス（10/14）
 - 教採ウォーミングアップ講座（10/14, 2/5）
 - 教採スキルアップ講座（4/24, 5/15）いずれもオンデマンドの動画配信
 - 教採ブラッシュアップ講座（6/5, 7/17, 7/29, 7/30）

2 教員のキャリアステージに応じた教員の資質・能力向上のための研修の企画・実施

- (1) 令和2年度 山梨にける教員育成推進事業
- 子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会（主催：山梨大学、共催：山梨県総合教育センター）
 - ・ 富士・東部地区（南都留合同庁舎 令和2年8月6日）
 - ・ 中北地区（北巨摩合同庁舎 令和2年8月7日）
 - ・ 峡東地区（山梨市役所 令和2年11月12日）
 - ・ 峡南地区（身延地区公民館下山分館 令和2年11月26日）

< 講師 >

堀 哲夫（山梨大学前副学長・理事）

辻本昭彦（法政大学理工学部兼任講師，武蔵野市立第五中学校非常勤教員）

○初任研への大学教員の派遣～教育学部教員，延べ24名が，県内24校を訪問

- ・ 派遣期間・回数 令和2年9月11日(金)～令和3年1月25日(月)
- ・ 派遣人数 延べ24人
- ・ 派遣校種 小学校：9校，中学校：10校，高等学校：5校
- ・ 派遣内容

「初任者による研究授業」の参観と，その後の「授業研究会」での指導・助言

- ・ 教科

小学校（国語・算数・道徳）

中学校（社会・数学・理科・英語・家庭科・音楽・道徳）

高等学校（地理・数学・生物・保健体育・英語）

(2) 教育フォーラム (12/7, 2/15) (主催：山梨大学, 共催：山梨県教育委員会)

第36回 教育フォーラム ～オンラインによる授業と学習支援の在り方～

○コーディネーター 山梨大学教育学部 附属教育実践総合センター 青柳 達也 特任教授

● 「オンライン授業のチャレンジから新たな学習活動の創造へ！」

雨宮 基博 氏 (道志村立道志小学校 校長)

● 「対面とオンライン それぞれのよさを学びに生かす」

～地域貢献を目指す附属中の実践～

保坂 伸 氏 (山梨大学教育学部附属中学校 副校長)

● 「遠隔授業のインフラ整備を経験して」

村松 久徳氏 (山梨県立甲府工業高等学校 教諭)

第37回 教育フォーラム コロナ禍における子ども支援 ― 教育相談として何ができるのか―

○ コーディネーター 山梨大学教育学部 附属教育実践総合センター 川本 静香 准教授

● 「幼稚園の取り組み ～子育てを支える～」

荻原 ひろみ 氏 (山梨大学教育学部附属幼稚園 副園長)

● 「学校支援を考える ～総合教育センターの視点から～」

榛原 砂穂理 氏 (山梨県総合教育センター相談支援部 主査・指導主事)

(3) 教員育成支援状況報告システムの運用

○令和元年度データの集計・分析, 報告書のとりまとめ

○令和2年度実態調査の実施

3 山梨県教育委員会・山梨県総合教育センター・市町村教育委員会等との連携・協働

(1) 山梨県教育委員会と山梨大学教育学部との連携協議会 (8/28, 1/27)

○全国学力・学習状況調査及び山梨県学力把握調査データ分析作業部会 (6/19, 7/2, 8/5, 8/28, 10/29, 12/17)

○ 総合教育センターとの連携・教育研究会 (5/21, 11/19, 2/18, 3/5)

附属学校園共同研究部門 事業報告

1 地域における指導的・モデル的な学校としての取り組みを支援

(1) 教員養成・教育実践研究協議会 (5/7, 9/1, 1/19, 3/9)

○企画局会議 (4/17, 7/6, 9/23, 12/23, 3/8) ※9/23 は企画・研究主任会

○研究開発部会 (9/1, 9/8, 2/25)

○実習・養成研修部会 (7/13, 2/9)

○地域支援連携部会 (5/28, 12/15, 2/16)

(2) 附属学校園と大学との共同による地域貢献

教員養成・教育実践研究協議会

○「実習・養成・育成研修部会」による「スキルアップ講座」

・令和2年9月30日～令和3年1月3日 附属幼稚園／動画配信

「傾聴と共感的理解」川本 静香 准教授 (教育実践総合センター)

・令和2年10月1日 附属特別支援学校

「特別な支援を必要とする児童生徒の学び方 ― 捉える視点と手だて ―」

永田 慎吾 准教授 (障害児教育講座)

・令和2年10月1日 附属小学校

「生活科の特性を生かした活動構成」

・令和2年10月1日 附属小学校

「新型コロナウイルス感染症状況下における体育科及び保健体育科の授業実施に関する調査について」

・令和3年1月26日 附属小学校

「甲府スタイル・学力向上」

清水宏幸 准教授 (科学教育講座)

・令和3年2月8日 附属中学校/オンライン (zoom)

「主体的な学び」をデザインするプロセスモデルの提案」

「G Suite for Education」の活用」

○「地域支援連携部会」による「研修・研究協力のための山梨大学附属4校園の教員派遣」事業

・令和2年8月18日(火) まみい・キッズこども園 「保育における記録」

・令和2年8月20日(木) こでまりこども園 「保育における記録」

・令和2年8月22日(土) 清和福祉会 大野山保育園 「保育における記録」

・令和2年11月5日(木) 甲府市研究協議会 幼年教育部会 学習会

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」及び

「保育現場の昨今の課題やコロナ対策等について」の講演

・令和3年1月13日(水) 一宮保育園「オンデマンド型研修の配信について」

○WEB 配信

コロナ禍の中、今年度は派遣が難しかったが動画等の WE 配信を一般にも公開した。

<幼稚園>

ホームページに「県内学校園に向けての学習支援」と題したバナーを用意し、臨時休業中の「動画配信による遠隔保育」の一部を地域へ公開した。本園の園児や保護者向けに、合計 56 本の動画を配信し、その中の 11 本を「一般視聴可能」とした。

保護者の相談窓口として「もやもや BOX」を WEB 上に作成し、保護者の心のケアにも取り組んだ。

<小学校>

Google ドライブを活用し、各学年国語・算数・理科・社会・外国語・体育・音楽・図画工作の教科を配信した。

<中学校>

ホームページに「県内学校園に向けて学習支援」と題したバナーを用意し、臨時休業中の取組も含め、ICT を活用した教育のノウハウと実践の紹介を行った。

アクセス数(2月5日現在)

- ・ YOUTUBE 配信について (全 6 ページ・4777 アクセス)
- ・ ZOOM を活用した教育活動 (全 4 ページ・854 アクセス)
- ・ G Suite for Education (なすだいふぞくオンライン) を活用した教育活動 (全 6 ページ・1437 アクセス)

<特別支援学校>

教科や生活単元学習の動画を 3 月 25 日から 6 月 16 日まで計 52 本配信。そのうち 40 本を一般公開した。

(3) 附属学校園の研究成果の還元、特色の広報

○「教員養成・教育実践研究協議会」の「企画局・研究主任会」による「共同研究概要リーフレット」の作成。

(4) 附属学校園「働き方改革推進プロジェクト」

○業務改善検討委員会 (7/6, 10/22, 3/8)

○校務支援システムの導入についての準備

(5) 附属学校園の機能強化のための情報収集

○日本教育大学協会全国教育実習研究部門 第 34 回「日本教育大学協会総会・研究協議会」(10/9) オンライン

○第 5 回「これからの附属学校の在り方を考える協議会」(11/21) オンライン

(6) 日本生活・総合的学習教育学会山梨県大会に向けての準備

○オンライン開催となり、授業公開は無くなる。各校園がフォーラムのパネリストとして参加。

2 教員を目指す学生に対する，大学・学部の教育実習計画に基づく教育実習の支援

- 「教員養成・教育実践研究協議会」の「実習・養成・育成研修部会」による教育実習の高度化・標準化への取組
 - ・「教育実習指導教師用手引き」，「教育実習生成績個票」，「教育実習評価基準」について評価・検討，**課題意識・主体性の喚起等**

3 大学・学部と附属学校園との教育・研究活動等への相互支援・協力

(1) 附属学校運営協議会 (11/11)

(2) 附属学校園の公開研究会等に向け，大学教員との共同研究の実施

○公開研究発表会

附属幼稚園 令和2年11月28日(土)～12月13日(日) オンデマンド

附属小学校 令和3年1月23日(土) オンライン

附属中学校 当初6月に計画していたが中止

附属特別支援学校 令和2年1月26日(火)～2月7日(日) オンデマンド

○「教員養成・教育実践研究協議会」の「研究開発部会」の呼びかけによる教育学部，教職大学院，附属学校園と地域を結びつける共同研究（大学教員が主催する共同研究会等

<令和3年度開催テーマ>

- ・ 自ら問いをつくり追究する「読むこと」の授業
- ・ 運動保育・体育・保健体育に係る学習会
- ・ インクルーシブ教育学習会
- ・ 保育を「読む」会
- ・ 小学校外国語教育の基本文献を読む学習会
- ・ 理科授業検討会
- ・ 演奏と鑑賞をつなぐ学習会
- ・ 探索・発見・創造・共同に基づく地域の教育文化創造プロジェクト（保育実践研究）
- ・ 生活科を学び合う勉強
- ・ 教員の業務を効率化するためのパソコン術の検討
- ・ 社会科読書会「しゃぼんだまの会」（授業づくりにまつわる知の獲得）
- ・ 学校におけるこれからのICT活用

○附属学校園の教員による大学の授業への協力・支援

教育実践研究領域 事業報告

附属教育実践総合センター 教育実践研究部門
山本英寿・饗場宏・田中一弘・中込繁樹

1 教員養成教育及び現職教員研修

(1) 山梨県との連携事業としての「期間採用者等研修会」

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止を考慮し、開催を中止した。

(2) 学部・大学院教育をとおした教員養成

①教育実習の今日的あり方に関する研究

教育実習委員会・教育実習検討専門委員会等における教育実習のあり方・実態・学生指導に関する研究を深めた。

②学部必修科目 「学校制度・経営論」

③教職大学院科目 「現代学校・教師論」「山梨の学校改革」「教育・地域課題挑戦プロジェクト実践論」「課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」等

④教職大学院 院生の連携協力校における実習の引率指導「実習Ⅰ・Ⅱ」

(3) 模擬授業室の整備及び活用

大学の授業だけでなく、教育実習期間中の教材作成や、研究授業の練習の場として、教員だけでなく、多くの学生が活用している。

(4) 附属4校園との連携

教育実習の成果と課題について附属4校園の担当者と協議し、効果的な教育実習のあり方を検討した。

(5) 山梨大学教師塾プログラムの取組

①教師力養成講座：令和3年2月8日実施，学部2年生等132名参加

教育実習への心構えを新たにすることや自身のキャリア発達を促す機会となった。

②初任者元気アップ講座：令和3年2月15日実施，学部4年生等12名参加

初任者としての心構え等を学び，教師としての自覚を再認識する機会となった。

③「ACTION PLAN」の作成（令和2年度版）

教職を目指して自主的な活動に取り組むための見通しや計画を立てる資料として，教育学部で実施させる講座やセミナー等の情報をまとめたチャートを作成した。来年度1年生に配付予定である。

④他大学の先進事例調査

鳴門教育大学と秋田大学の調査を行い，本学部及び附属教育実践総合センターにおける教職支援活動の今後の展開を考えていくうえで多くの示唆を得た。

2 学外との連携

(1) 山梨県教育委員会との連携

県総合教育センター指導主事，大学教員，客員教授等による連携・教育研究会を開催し，センター研究のサポート及び大学講義「学校制度・経営論」を実施した。

(2) 公立学校・市町村教育委員会関係

山梨県教育委員会主催事業，小学校・中学校等の校内研究会等への協力を行った。

(3) 免許更新講習の実施

「学習指導要領の改訂の動向等」「法令改正及び国の審議会の状況等」の講義を行った。

情報教育研究領域 事業報告

教育研究実践部門 情報教育研究領域 成田雅博

1 情報教育に係る教員養成

- ・学部教職科目「授業分析論」(教育の方法及び技術), 学校図書館司書教諭科目「情報メディアの活用」, 博物館学芸員科目「博物館情報・メディア論」, 大学院科目「情報教育・ICT活用の理論と実践」「学校安全と危機管理」。
- ・授業臨床部会運営委員会と連携して教員養成課程カリキュラムの改革・実施。
- ・教育実習検討専門委員として教員育成に参画。

2 情報教育に係る教員育成支援

－教育委員会・総合教育センター・学校等との連携及び学部全体の教員育成支援調査

- ・教員育成支援状況報告システムの運用。
教育学部教員に対する Web アンケートの実施。
対象教員 98 名中 65 名から 213 件 (前年度比 64%減) の回答 (2021 年 3 月 2 日現在)。
- ・山梨大学教育実践総合センター－山梨県総合教育センター 連携・教育研究会に参加し, 山梨県総合教育センター指導主事による研究に指導助言, 研究討議。
- ・KAGAC(e ラーニング教員免許状講習)山梨大学ワーキンググループ代表として, 山梨大学提供科目に関する業務を統括。
- ・やまなし ICT 利活用教育研究会代表幹事として研究活動に貢献。

3 大学の教育・研究への ICT 活用

- ・授業研究における ICT の教育・研究への活用支援 (オンライン授業, e ラーニング)。
- ・教職科目「授業分析論」における ICT 活用指導。

4 施設・設備の管理・学部共通利用サービス

- ・「授業分析論」で利用する授業研究演習室 (J422) の維持管理。

5 その他

- ・第 22 回全国中学高校 Web 教材コンテストの最終審査員として, 中学生, 高校生のグループが制作した Web 教材サイトに関する指導・助言。
- ・公益財団法人パナソニック教育財団専門委員として, ICT 教育に関する実践研究助成に関する審査, 助成金受給校・教育センターに対する指導助言。
- ・山梨県青少年のインターネット利用環境整備連絡協議会会長として, 初等中等教育における情報モラル教育に関する情報交換 (事務局: 山梨県教育庁社会教育課)。
- ・国立大学教育実践研究関連センター協議会メーリングリスト cerd の管理・運営。
- ・センター関連メーリングリストのアドレス管理 (kjc-ML, jissen-ML, jissen.unei-ML, jissen.kiyou-ML, ls-ML, ls-ta-ML)

教育臨床研究領域 事業報告

教育研究実践部門 教育臨床研究領域 川本静香

【教育相談事業・教員養成教育】

1 教育相談事業

- ・山梨県教育委員会等との連携事業である「地域連携 子どもと親と教師のための教育相談事業」を継続し、教育相談連絡協議会に出席した(12月10日)。県関係の教育相談は主として教育臨床研究領域協力教員および非常勤相談員が担当した。相談延べ件数は、R3年1月末で県関係366件(前年同時期336件)であった。
- ・山梨県教育委員会教育相談連絡協議会の研修会「教育相談の在り方」(12月10日：参加者19名)の講師を務めた。
- ・スクールカウンセラーによる附属学校園の教育相談については、新型コロナウイルス感染症による休校期間中は電話や動画での心理教育を実施し、休校明けより附属小学校、附属中学校では週1日、附属幼稚園ではカウンセリング希望があった場合に相談活動を行った。
- ・R3年度戦略・公募プロジェクトの予算申請を行い、R3年度非常勤相談員謝金を確保した。
- ・本センター「山梨大学教師塾」ならびに教育実習委員会において「教育実習生のメンタルサポート」を担当した。

2 附属教育実践総合センターと県との連携（山梨大学地域連携事業）

- ・「連携・教育研究会」の主事研究（「授業を支える集団づくりの充実を目指す学校へのアプローチ—センターのシンクタンク機能を活用した学校支援—」研究）に協力した。

3 附属学校との共同プロジェクト・研究会・教育相談

- ・附属4校園教育相談担当者と附属スクールカウンセラーチーム（大学教員1名）、非常勤相談員との教育相談室連絡協議会をメール会議にて年3回開催した。
- ・スーパービジョン、コンサルテーション等を要請に応じて随時実施した。特に、前年度より附属中学校において虐待事案に関するコンサルテーションとカウンセリングを継続しており、児童相談所、甲府市、病院と連携を行うとともに、要保護児童対策地域協議会に参画した。

【対外的な教育・研究活動】

1 公立学校への研修会講師、コンサルテーション活動

- ・公立学校での教育相談研修会講師、コンサルテーション活動等を要請に応じて実施した。
- ・小中学校生徒指導主事研修会（2020年11月10日）において研修会講師を務めた。
- ・高等学校生徒指導主事研究協議会（2020年9月15日）において研修会講師を務めた。
- ・県立高等学校校長会(2020年9月28日)において緊急の自殺予防研修会講師を務めた。
- ・総合教育センター主催夏季研修会（オンライン）にてSOSの出し方教育に関する研修講師を務めた。

R2 教職支援部門（室）活動報告

教職支援領域

【領域の方向性】

- 1) 学生が自主的に学ぶための環境・支援体制づくり
 - ・様々な教職支援との連携をはかり、学生にとってわかりやすい支援をめざす。
教採対策 WG, 進路支援委員会, 補佐会, センター内他部門, 学部教員など
 - ・学生カルテ・分析領域との連携により、個に対応するきめ細やかな指導と、
次年度につなげるための振り返りや方向性の検討を行う。
- 2) 目標値達成のために教採受験者を増やし合格率を維持する
 - ・入学時・実習前・実習後の教員志望者増のための方策を検討する。
(山梨県小学校教員 35%問題への対応も含む。教員志望でない学生に疎外感を味合わせないように留意する。) 1,2 年生教職支援検討 WG との連携
- 3) 卒業後の支援体制づくりの検討
- 4) 業務のルーティン化と効率化を図る

【事業報告】

- ①新型コロナウイルス感染症対策による「令和2年度教職支援年間スケジュール」の修正（随時）
随時修正を行い、その都度教育学部 HP（学部内専用）に掲載。
- ②教授会での教員採用試験や対策講座・ガイダンス等の情報提供・周知（随時）
- ③「教員による個別指導一覧表」（令和2年度版）の作成・掲示（5月）
- ④「教員採用試験対策指導の基本的な視点と内容」の作成・教員へ配布（6月）
「（指導のための）教員採用試験対策のスケジュール」, 「私立学校教員採用・適性検査に関する情報」を合冊。
- ⑤「卒業後・修了後フォローアップ」教育学部 HP の更新（9月）
「教員就職に関するフォローアップ」「卒業後の連絡先の追加」の項目追加。
- ⑥教職支援検討会の開催（2月）
「令和3年度教職支援年間スケジュール」の検討・作成。
3月中に教授会で周知予定。
- ⑦令和3年度版教員による個別指導一覧表の検討（3月）
卒業生追跡調査結果や地域学習アシストでの活動をふまえ、「教育ボランティアに関する指導助言」をその他に追加。
- ⑧学生カルテ・分析領域との連携による教職支援のふりかえりと総括（3月末予定）
今年度の「進路支援アンケート結果」「教員採用試験結果-数値分析」をふまえ、必要な教職支援を検討する。教職支援部門拡充2年目の総括を行う。

教職支援室

【方針】

- 1) 学生の教員志望への意識喚起
- 2) 教員採用試験対策
- 3) 各領域の活動を調整・統合し、学生の実践的能力を養う

【事業報告】

- 1 学生生活・進路に関する個別面談の実施（進路支援アンケートと合わせて実施）
 - 対象者（在籍） 1年生 133人, 2年生 134人, 3年生 131人
 - 実施日時（時間はいずれも 13:00～16:00）
1年生（7/1, 8, 15） 2年生（6/10, 17, 24） 3年生（12/15, 16, 17, 23）
※コースごとに実施日時を設定し、都合がつかない学生は日程調整の上、個別に実施
 - 2 教員採用試験対策講座等の企画・運営・実施
 - 教員採用試験スタートガイダンス 1(7/22)・2(8/5) ○集団討議講座(5/26)
 - 学内模試 1(12/8)・2(1/12)・3(2/9) ○教員採用試験基礎ガイダンス(10/9)
 - 教員採用試験に向けての相談会（相談期間）(11/24～12/11)
 - 論作文演習 1(12/7)・2(12/11) ○4日間集中一次試験対策講座(2/15,16,18,19)
 - 3日間集中二次試験対策講座(3/2,4,5) ○実践力養成講座 1(3/17,18)・2(3/24,25)
 - 二次試験対策講座 1(4/28,30)・2(6/9,11) ○教員採用試験願書指導(5/12)
 - 一次試験最終対策講座(6/16) ○二次試験直前対策講座(8/4,6)
 - 山梨県教員採用候補者選考試験説明会(5/11) ○模擬試験弱点強化講座(1/8) 等
 - 3 教員採用試験対策（個別指導）の実施
 - 論作文指導 ○面接指導 ○志願書・自己紹介書等指導 ○集団討議指導
 - ※各指導は原則予約制により、指導時間は1件当たり1時間程度
- 【実績】 令和2年度（令和2年4月～令和3年2月まで） 2.26 現在
- | | | |
|--------------------|------|------------------|
| ○論作文指導 | 指導回数 | 786回 |
| ○面接指導（含む模擬授業・集団討議） | 指導回数 | 810回 |
| ○志願書・自己紹介書等指導 | 指導回数 | 305回 |
| 合計 | 指導回数 | 1901回, 実質人数 127人 |
- 【参考】 令和元年度 指導回数 1497回, 実質人数 118人
平成30年度 指導回数 812回, 実質人数 89人
平成29年度 指導回数 350回, 実質人数 51人
- 4 虎の巻（合格者の声）山梨県版・各自治体版の作成
 - 5 山梨県教育委員会説明会の企画・運営・実施
 - 6 徹典会塾との調整

学生カルテ・分析領域

【領域の方向性】

- 1) 教職支援領域との連携（教職支援領域の方向性に同じ）
環境・支援体制づくり，受験者増・合格率の維持，
卒業後の支援体制づくりの検討，卒業生・修了生追跡調査の実施
- 2) 教職キャリア・ポートフォリオ（キャリポ）の運用開始，浸透・定着
- 3) 業務のルーティン化と効率化を図る≡この領域におけるふりかえり

【事業報告】 ※点線は概算要求の R2 年度計画

教採等に関する学生の情報収集と情報共有

- ①進路支援アンケートの検討・実施（4月・11月）
4月進路志望調査/3年・4年・M1・2，11月教採後/4年・S1・M1・2
各コース・系の目標値設定のための情報提供，
志望状況について教採対策WG，進路支援委員会，微典会，各コース等と情報共有
- ②令和2年度進路状況報告書の検討・実施（教採受験番号の提出）（6月）
- ③教員採用試験成績開示の推奨（7月）
- ④教育学部（学校教育課程）教員採用試験志願状況の取りまとめと情報共有（7月）
- ⑤教員採用試験第1次試験・2次試験の結果の取りまとめと情報共有（8～11月）

教職キャリア・ポートフォリオ

- ⑦説明会の実施（4～10月）
前期進路支援ガイダンスでの周知を予定していたがガイダンス中止のため，4年生に対しては，動画配信，
ブラッシュアップ講座等の対策講座で周知。3年生に対しては後期進路支援ガイダンス等で周知。
- ⑧運用のためのデータ入力（随時）
対策講座の参加率，教員による個別指導実施報告，教採受験状況・教採結果・アンケート等のデータの一元管理
- ⑨教職キャリア・ポートフォリオを活用した教採結果の分析（11～2月）
分析WGと連携して教員採用試験結果数値分析，進路支援アンケート結果分析。
分析結果の共有（教授会で周知）。教職支援領域等と連携し次年度の支援に役立てる。
- ⑩教職キャリア・ポートフォリオの検証とメンテナンス
利用状況や満足度を調査するため，3，4年生に対してアンケート実施（11月）。
システムへの入力・出力等について検証，不具合についてメンテナンスを依頼（随時）

卒業後の支援体制づくり

- ⑪卒業生・修了生追跡調査の実施・分析（12～2月）
地域学習アシスト領域と連携し，実践的な教育プログラムの検証着手（3月予定）
- ⑫卒業後の連絡先等の登録（卒業後・修了後の連絡先等の収集）（1～3月）

教育ボランティア領域

【領域の方向性】

- 1) 教育ボランティア委員会を中心に活動継続
- 2) 教育ボランティアへの参加学生を増やす
- 3) 地域学習アシスト領域と連携しながら、活動を再検討

【事業報告】（今年度は、コロナ禍の影響により前期の活動は中止し、後期のみ活動）

1 教育ボランティア委員会の活動

- (1) 第1回教育ボランティア委員会開催〔年間活動計画他について協議〕(4/8)
- (2) 第2～4回教育ボランティア委員会開催（メール会議）(4/21～24, 7/7, 1/6)
- (3) 第5回教育ボランティア委員会開催〔単位認定及び総括〕(2/3)
- (4) 教育ボランティア受入れ先訪問（1/27, 北新小・上条中）
- (5) 教育ボランティアだより発行（2/1）
- (6) 後期ガイダンス(9/2)・報告会(12/9) 参加（スタートセミナーは中止）

2 教育ボランティア学生運営委員会の活動（参加学生を増やす取組を含む）

- (1) 新入生へのチラシ配付（新入生ガイダンスの折に配付）（中止）
- (2) 教育ボランティアスタートセミナー開催（中止）
- (3) 学生運営委員会開催〔全6回〕(8/5, 11/11, 11/25, 1/20, 2/9, 3/11)
- (4) 後期教育ボランティアガイダンス開催（9/2）（前期は中止）
- (5) 教育ボランティア通信作成（9/20, 12/22）
- (6) 教育ボランティアガイダンスブック発行（1月〔編集〕2月〔校正〕3月〔発行〕）

3 受入先との連携

- (1) 前後期ガイダンス参加希望調査（3月・8月）
- (2) ガイダンス案内・担当者等調査送付（4月）
- (3) 前後期教育ボランティア学生名簿送付（9月）
- (4) 活動報告書・ガイダンスブック原稿提出依頼，アンケート依頼（12月）
- (5) 報告書提出（1月）
- (6) その他受入れ先との連絡調整を随時実施

4 教育ボランティアに関する他大学の情報収集（中止）

5 教育ボランティアの周知の検討

6 地域学習アシスト領域との連携

地域学習アシスト領域

【領域の方向性】

- 1) 昨年度の試行で得られた成果と課題をふまえ、地域学習アシスト事業を本格実施
 - ・学生・教員・学校にとってよりよいアシストのあり方を模索する
 - ・学校との連携を深める。相互の負担感の軽減、教員と学生が並ぶ関係の構築
- 2) 地域学習アシスト事業について学部教員に理解してもらうことに努める

【事業報告】

- ①地域学習アシストWGの開催（10月、12月、3月）
- ②継続受入予定校の聞き取り調査（6～8月）

新規受入予定校の聞き取り調査・学校との打合せを経て、受入校を決定
- ③各学校の支援課題の検討、アシスト事業の実施方法、子どもと学生のマッチングの検討、学校との打合せ（9～10月）
- ④県教委・市教委との調整（9月）
- ⑤アシストチーム編成（10月）
- ⑥アシストチーム打合（各学校への支援方針の検討を含む）、実施校挨拶（10月）
- ⑦地域学習アシスト実施（学校引率、チームカンファレンス）（11～2月）

コロナのため11月より開始。継続2校+新規1校で実施。各校において11～12回のアシスト活動、大学に戻り分科会方式を中心に計13回のカンファレンスを実施（13回目はアシスト活動全体のふりかえり）。実施校との連携（相談・情報交換）、アシスト活動記録の取り方。
- ⑧実施校アンケートの実施（2月）
- ⑨地域学習アシストの単位認定（2月）

教職支援部門会議で、単位認定のための条件を確認し、アシスト学生5名に対して「学校支援実習（地域学習アシスト）1」単位認定。内規作成の検討。
- ⑩FD研修会の開催を検討・実施（2月）

アシスト活動2年目の報告を行った。
- ⑪チームによる総括とふりかえりの実施（その成果を検証する）（2～3月）
- ⑫卒業生訪問調査の検討・実施（2月）

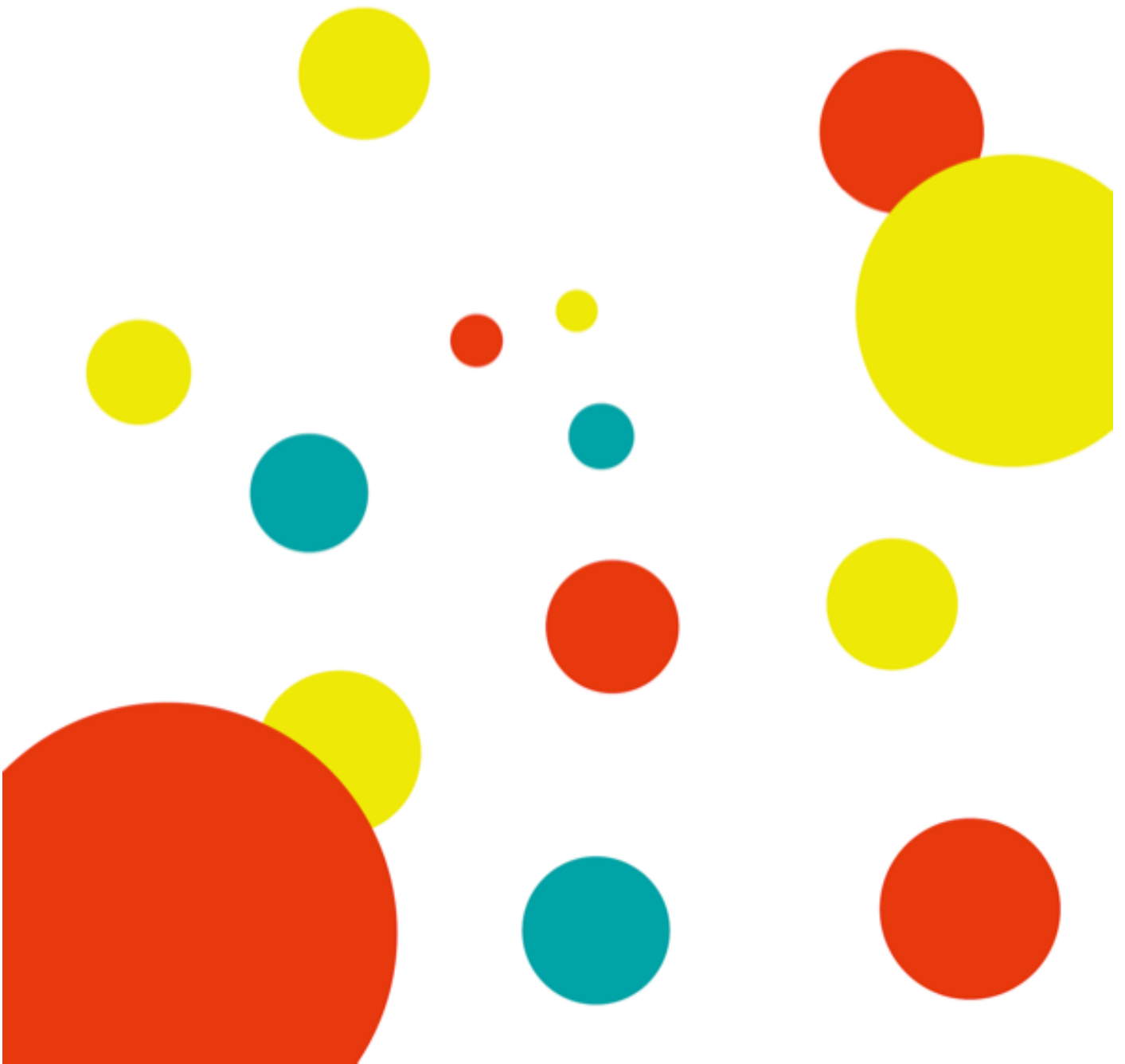
昨年度アシストに参加した初任者2名に大学に来てもらい、聞き取り調査を実施。
- ⑬活動報告書の作成（3月）

実践的な教育プログラム開発事例として地域学習アシストを位置づけていく。

【部門全体】

- 教職支援部門会議（10月、12月、2月、3月）の開催
- 動向調査の検討・実施（県内・県外教育委員会の動向等）（10～11月）
- 静岡県・静岡市・浜松市・神奈川県・横浜市・川崎市・相模原市・長野県教育委員会

センター教員の ひとこと



センターニュース第29号から、実践センターの教員が1年を振り返った「ひとこと」を新たに掲載することとなりました。

実践センターの教員にとってR2年度はどんな1年だったのか、ぜひお目通しください。

(あいうえお順、敬称略)

● 饗場 宏

先日、体温を自動で計測する機能が付いたスマートウォッチを購入しました。リンゴのマーク入りの製品でなく、5000円以下の廉価品ですが、なかなかの優れものです。体温計で測り直してもほぼ同じ結果を示します。最近では、施設やお店などの入り口で求められる検温に対し、腕もとで検温表示を確かめては、堂々とおでこを差し出しています。画面に自分の顔が映る自動検温機器の場合は、「ハイチーズ」的な笑顔でカメラを覗き込んでいます。今年の今頃はこのような状況になかったことを考えると、ハイテク音痴な私を少し成長させてくれた一年であったと思います。

さらに一昨年の今頃と言えば、インフルエンザB型で苦しんでいたことを思い出します。マスク・手指消毒・密の回避など、生活のしにくさを感じることもある毎日ではありますが、インフルエンザとは無縁の生活を送っていることにはありがたさも感じます。

世界中がコロナ禍で大変な状況であることは揺るぎのない事実であり、つつい愚痴がこぼれる私ではありますが、この状況の中にあっても感じられる肯定的な何かを探しては、周囲の人と共有していきたい願っています。

この一年間、当センターも様々な事業の修正や変更が求められましたが、だからこそ気づけた大切なもの、取止めてもいいものを洗い出し、持続可能な運営という観点でマネジメントしていけたらよいのかあと考えています。ありがとうございました。

● 青柳 達也

今年度から山梨大学に勤務させていただいています。大学への勤務は初めてであり、戸惑うことも多くありましたが、皆様に助けられながら、なんとか一年を無事？終えようとしています。

山梨大学甲府キャンパスは自宅から約3kmと近いため、相川にそって自転車や、時には徒歩で通勤しています。通勤の途中、ダイサギ、コサギ、カワセミ、オオバン、ツグミ、ジョウビタキなど多くの鳥たちを見かけることができ、何か癒されるような気がします。

今年度は、コロナ禍であまり登山（山歩き）に行けませんでした。身近な自然を楽しむことができました。来年度はどんな年になるかわかりませんが、それなりに自分なりの楽しみを見つけて頑張りたいと思います。

● 川本 静香

R2年度を振り返ると、「あっという間」であったように思います。新型コロナウイルスに右往左往しながら、教育相談担当として現場に向かう毎日でした。ぶっちゃけると、7月から11月くらいまでの記憶がほぼありません。。。私は何をしていたのか。。。

年が明けて、ようやく地に足をつけた日々が過ごせるようになった気がしています。きっとコロナの脅威は今年も続くけれど、そのなかでも何か楽しいことができるといいなあと思っています。ちなみに流行りに乗ろうと、キャンプをはじめました。焚き火（withお酒）に癒やされるというのは、本当だったのですね。

● 倉茂 花苗

R2 年度を振り返り、新しく「はじめた」ことがあります。それは、ペットを飼い始めたことです。コロナ禍により、家で過ごす時間が増えたため、思い切ってメダカとハムスターを飼い始めることにしました。今まで、メダカとハムスターは飼ったことがなく、元気に育ってくれるのか少々不安でしたが、元気に育っています。ちなみに、ハムスターの名前は「豆大福」です。由来は丸くなると豆大福に似ているから…安直な由来です。毎日、メダカの泳ぐ姿、ハムスターのおやつを食べる姿に癒されています。



● 澤登 義洋

もしも歌がなかったら 誕生日のケーキは味気なかっただろう もしも歌がなかったら 卒業式は誰も泣かなかっただろう もしも歌がなかったら ゲーテは詩なんて書かなかっただろう もしも歌がなかったら 一人ぼっちは耐えられなかっただろう もしも歌がなかったら あなたと出会うことはなかっただろう

「もしも歌がなかったら」(作詞：宮本益光)

先日、この歌に出会い、コロナ禍の中で、子どもたちが満足に歌が歌えないということがどういうことなのか、改めて考えさせられました。一刻も早く子どもたちが、笑顔いっぱい楽しく、表情豊かに、そして心を込めて歌が歌える日が来ることを願わずにいられません。

● 清水 宏幸

昨年度末に人生の目標としていました博士論文を書き上げ、6年間かけて東京学芸大学大学院博士課程を修了しました。この論文では、私が中学校数学科の教員として20年間生徒たちと授業をする中で感じていた文字式の理解の困難点を顕在化し、それをどのように指導に生かすかを考察しました。今後も継続して研究を続けたいと考えています。今年度は、コロナ禍で土日の東京への出張がまったくなくなりましたので、これを機に、続けていたランニングの距離を伸ばそうと取り組んできました。今では、13,4kmほど走れるようになり、自宅からこのくらいの距離のコースを4つほど開拓し、仕事のない雨以外の日にコースをローテーションして楽しく走っています。今後も無理をしない、自分のペースでというモットーのもとランニングを続けていきたいと思っています。

● 高橋 英児

2020年は、新型コロナウイルス問題を通して、「学校」について改めて考え直すことになった一年でした。一斉休校中・再開後の我が子たちの様子や学校参観を通して感じたのは、何よりも学校は、子どもにとって、様々な大人から保護され・ケアされる安心・安全な場所であるということでした。そして、学校が、子どもが友達・仲間との出会い・交わり、自分たちの社会・世界を製作する場所であることでした。次年度はこうした発見を基に、子どもたちが自分(たち)の夢や希望を育み、その実現に向けて活動できるような「楽しい」世界を保障する場所になるための学校づくりや日々の授業づくり、学級づくりについて考えていきたいと思っています。

● 田中 一弘

主に小学校の教員をしていましたが、令和元年度よりこちらにお世話になっております。趣味は、海釣りや野菜作りを少々。あと、車が好きで、希少なマニュアル車に乗っております。野菜作りでは、虫や獣に食べられてしまったり、気候によってうまく生育しなかったりと失敗ばかりですが、想像以上の野菜の甘さに自然の恵みをいただいている感じがして、とても好きです。海釣りは主に船釣りですが、船出の瞬間の「俺の船」感と、帰港の際の脱力感が素敵です。今後の教育界を担う若者に関わらせていただいていることに、喜びと責任を感じながら、明るく楽しく過ごさせていただいております。

● 中込 繁樹

4月、県の人事交流により本学に赴任しました。慣れない環境での職務に戸惑うことも多い日々でしたが、周囲の皆様のお力添えをいただいて何とか無事に年度末を迎えられました。またこの一年間は新たな出会いの連続でした。大学の先生方や職員の皆様、大学院生やその実習校の皆様等々、多くの方々との縁をいただきました。そして、幼稚園から大学まで校種の違う先生方や、様々なキャリアを積んでいらっしゃる専門職の皆様のお話やお仕事をされる姿から多くのことを感じ学ばせていただきました。これからも、折角のいただいたこの縁をたいせつにして、本学のために微力ながら自らの職責を果たしていきたいと思っております。

● 中村 宗敬

3月になり日が回復してまだ明るいうちに帰路につくと、西方に大きくそびえる鳳凰三山から続く辻山あたりの奥に覗く白い山々にはっとさせられる。まさに白峰の名の通りだなと、毎年あらためて感嘆の思いで見入ってしまいつつ、三山の最高峰である北岳が見えないことを惜しく思う。もちろん、少し移動すればその整ったピラミッドも視界に入るのであるが、最近は見えないこともまた趣きがあると思い始めた。少々青臭い言い方で強引な類比ではあるが、深田久弥が言うように、北岳は「いつも前山のうしろに、つつましく、しかし凜とした気概をもって立っている」のであって、学生に対する我々の支援もたまに表に出てこそよいと考えている。

● 成田 雅博

昨年度末は、コロナ禍のなか安倍前首相が、唐突に全国の学校に一斉休業を要請しました。これは明治の近代学校制度始まってから初めてのことで、今年度に入っても、多くの学校で休校が続きました。教職大学院の実習はどうなることかと心配しましたが、私が担当した甲府西高と富竹中には「大人の対応」をしていただき、大変ありがたく思いました。休校中のオンライン授業、休校明けの感染対策、給食での黙食の徹底等、日本の学校や教師、そして生徒はすごいなあ、と改めて感心しました。これからの新型コロナウイルス感染対策の一つ、マスク会食や黙食の徹底については、学校給食での実践をもっと手本にしたらいいなあ、と思いました。

● 新野 貴則

どんなに忙しくても、むしろ、いそがしければ忙しいほど小さな楽しみを大切にします。それは、例えば物を愛でること。骨董品（といっても、雑貨ばかりで手軽に買えるもの）が好きなのです。今のお気に入りはいちばんの朱肉入れ。購入時は朱肉がカラカラに乾いていて、使えなかったのですが、朱肉を取り出し、インクを加え、お湯で温めながら揉みこみ、使えるようにしました。手間をかけた分、愛情は膨らみ、使う時は「んふ」と微妙な笑みがこぼれてしまいます。もともと使う機会は少ないのですが、これからさらに機会は減ってしまうのかなと思うと、ちょっぴり寂しいのです。



● 蘗原 桂

この写真は南アルプスの仙丈ヶ岳から撮影しました。日本一の富士山(3776m) 第二位の北岳(3193m) 第三位の間ノ岳(3190m)が一望できます。それぞれの山に希少な野生動植物が生きています。コロナで私たちの生活はずいぶん様変わりをしました。自然の営みは変わらずまた春がやってきます。どんな困難が起きようとも、人はその英知と豊かな想像力を使ってたくましく生き抜くと思います。私は豊かな自然に恵まれたふるさと山梨で生活できることを幸せに感じています。コロナに負けない想像力でもっと、もっと自然を楽しみたいと思っています。



● 長谷川 千秋

人と人が、当たり前に接することが当たり前でなくなり、画面を通したことばの虚しさと、ことばというものの限界を感じる一年でした。

一方で、何気なく発せられた人のことばに心を動かしたり、救われたりすることもありました。

ことばの研究者として、これからもことばの真理を追究しながら、人と人が、人とわたしがゆるやかに通い合うような、すてきなことばとの出会いがあるようにと願っています。

また、そんなことばを自分も発することができるようになれたらな、と思います。

さて、いつになったらそんな風になれるのかな。

● 山本 英寿

令和2年度は、目に見えぬ未知のウイルスに翻弄された年でした。そして、日常の大きな変化から、私たちは「当たり前の日常」というものが、いかに大切であったかに気づかされました。これまでの取組についても、実施すべきかどうかから検討するとともに、どうすれば実施できるのか、大切にすべきものは何かを常に考えるようになりました。ある意味これまでの取組を総点検するチャンスであったと思います。また、当たり前や例年通りを見つめ直す目を持つことの大切さを学ぶ機会となりました。物事の本質を捉えることができるように、コロナ禍が考える機会を与えているのかもしれない。

山梨大学教育学部
附属教育実践総合センター ニュース 第 29 号
THE CENTER NEWS No.29 2021.

The Center for Educational Research
Faculty of Education
University of Yamanashi

山梨大学教育学部
附属教育実践総合センター

代表者 田中 勝

〒400-8510 甲府市武田四丁目 4-37

電話 055-220-8325 FAX 055-220-8790

e-mail: jissen@ml.yamanashi.ac.jp

発行 2021 年 3 月 31 日